

## いつも喜んでいなさい

(テサロニケの信徒への手紙 1 5章 16～22節)

「いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、すべてのことに感謝しなさい」、この御言葉は世々のキリスト者を励まし続けてきた聖句です。

けれども同時に、いつもは喜べないなあ、そうは生きていないなあ、と思う人もいると思います。とくに教会に初めて来た人などは、こういうことを聞かされると無茶を言わないで下さいと怒り出すかもしれません。世の中はいまコロナウィルスで大変ではないか、客足もパラパラで商売はあがったりでとても喜べるような状態ではないと返されるかもしれません。

このパウロの勧めを、わたしは花嫁の着るウェディングドレスのベールではないかと思っています。わたくしはウェディングドレスをもちろん着たことはありませんが、言いたいことは、頭にかざるベールは最後に着付けるものですね。このパウロの勧めも、これまでテサロニケの信徒たちとのやりとりの中で、彼らの信仰のありようを喜び、ほめ、理解の不足している点についてはアドバイスを与え、そして信仰と愛にもとづく共同体を作るチャレンジに留まる姿勢、その彼らのありかた、神に向かう生き方が、マケドニア州全体に対する証になっている。また同時に、パウロや、テモテや、シラスといったその存在を賭けて主イエス・キリストの福音を伝えた伝道者たちに、ああ、生きていて良かった。あなたがたの信仰によって、わたしたちも力づけられましたと喜びを与え、生ける神の働きに感謝する様子が、この手紙に縷々綴られていたわけです。そして最後に、手紙の結びにあたるところに、この「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝しなさい。これこそ、

キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」という決め台詞が来るのです。最後にベールをかぶるのです。この勧めは、主イエス・キリストに結ばれて新しい生き方、主と共に生きる二人三脚のステージに移った者たち、主に召し集められた群れ、つまり教会に生きる者たちに与えられた冠なのです。

この手紙には出てこないのですが、パウロはキリストを着るといふ表現をほかの手紙では使います。それは罪びとであるわたしが主イエス・キリストの贖いの業によって罪赦され、神の前に立つことの許される者として頂いている。わたしたちは、「主イエス・キリストの御名によって」と祈ります。子であるキリスト・イエスの、十字架の死による執り成しを受けているので、神さまに面会が可能になっている。アクセスが出来る。イエス・キリストの御名によって執り成されて神さまの前に願い事を携えて立つことの出来る者とされている。本来、ふさわしくない者が天狗の隠れ蓑ではないですが、キリスト・イエスの十字架の贖いを身に纏っていることによって義とみなされている、キリストを着るとはそういう状態です。これを恵みというのです。そこには神さまの側の、わたしの応答に先んじた選びがあり、計画があることを信じて、わたしたちは信仰生活を続けるのです。今日読んだすぐ次の個所、23節にパウロは次のような願いを置いています。ここも今日、一緒に読んだ方が分かりやすかったですでしょう。「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られる時、非の打ちどころのないものとして下さいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずその通りにして下さいます。」「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝

しなさい。」という勧めは、このような神さまの側の働きかけを前提としています。いや、この場合は前提というか後見ですね。後見人の後見です。前提はすでに、わたしたちのためにキリスト・イエスが世に来られ、すべてを変えてくださっています。わたしたちを神さまにアクセスすることの出来る者に変えて下さった。そして、どのように歩んだらよいかを教えて下さった。あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさいと弟子たちに言われたことです。それに従ってテサロニケの人々も、新しい生活に入った。文字通り、さまざまなものを組み替えていったのです。当時の社会では当たり前であったことが、彼らにとっては当たり前ではなくなりました。それらは避けるべき、忌むべき行いになりました。そして、キリストの愛に支えられた互いへの献身によって、民族や、性別や、階級差を乗り越えてゆく新しい集団、主に召し集められた群れを作り出していった。天国のコロニー、神さまの御心のなる天国の植民地という言い方を先週したように思いますが、こういうキリスト・イエスが成し遂げて下さり、いまも聖霊によって共に歩んで下さっているという主のご臨在の許に、教会は立てられ、生かされているのです。もし、彼らが福音に出会って救われる前の状態ならば、このみつつの勧めはされなかったでしょう。4章7節に「神がわたしたちを招かれたのは、汚れた生き方ではなく、聖なる生活をさせるためです」という招きが置かれています。彼らが、聖なる生活、すなわち神によって取り分けられた生活を心がけないならば、いわゆる肉の人、キリスト・イエスに結ばれて歩んでいないのです。信仰による知見をもたない人間は、いつも喜んでいなさい、絶えず祈りなさい、どんなことにも感謝しなさいと言われても戸惑うばかりでしょう。キリスト・イエスと出会う前のテサロニケの人たちは「いいことがあったら喜んでいます」「願い事があったら偶像にお祈りしま

す」「嬉しいことだけ感謝します」という生活でした。これが生まれつきの、神を知らない人間の在りようでしょう。選択的に喜び、みずからを頼りとして神を顧みず、というか真実により頼むべき方を知らないという問題です。こういう世界、御言葉に出会わない世界に生きていれば、いつも悲しんでいる人や、神も仏もあるものかという人や、災害や不幸があると神が本当にいればこうなるはずはないと当たり散らすか、どんなことにも満足せず、不平を呟くようになるでしょう。当然です。わたしたちは老いてゆき、死ぬ存在なのですから、終わりに近づくとつれて生きることが困難になってゆくのは当たり前なのです。しかし、そのように神を知らずに、知ろうともせずに、自分を神としてすべてを裁き、やがて自分が神のように生きることが出来ないことに絶望して死んでいくしかなかった神に背く者たちのところに、神は、その独り子を遣わして下さったのです。そんなことをする必要はなかったにもかかわらず、です。ここに神の愛があり、備えがあり、召し出した者たちを通して世を救おうとするご計画と憐みがあります。この先んじて、御子を礎としてくださり、同伴者として下さっている恵みの上に、この驚くべき恵みの前提のうえに、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」という勧めがくるのです。主と結ばれて生きる者への招きですね。主イエス・キリストと、その父なる神と切り離されたところで、これらのことをせよ、と言っているのではない。もうすでに世界は変わっているのです。キリスト・イエスに結ばれたわたしたちは異なったステージに移されているのです。2020年は思いもよらぬ年になりましたが、それとて神がともにおられる年、2020年です。キリストが来られてから2020年目、西暦はキリスト教暦であり、AD（アンノ・ドミニ：紀元）とは

主と共にある年という意味です。それは神の御支配のもとにすべてが置かれているという確信にもとづくのです。キリスト教は偶然や運命を信じず、神の摂理、神さまがお造りになったものに目を注ぎ、最善のものを備えてくださることを信じる宗教です。神の独り子が、わたしたちに与えられたことから信じる事が出来るのです。パウロが願ったように、平和の神ご自身が、わたしたちを「全く聖なる者とし」「霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り」、わたしたちの主イエス・キリストの来られる時、非の打ちどころのないものとする事を願っておられる。それゆえに、わたしたちは「いつも」「たえず」「どんなことも」、神さまの御前にある出来事であることを疑わない。なにひとつ神さまの注がれる眼差しから逸れるものなどないことを信じて、生きるのです。わたしたちがなすことに誤りや、失敗はあります。間違った選択をしてしまったと後で臍を噛むこともあるでしょう。残念な結果に終わる事態もあるでしょう。しかし、そうした現実もすべて主の執り成しと神の眼差しのなかにあることを信じて生きる。それが主に召し集められた者たちに許された恵みであり、そこに生きるための手段が、「いつも喜んでいくこと」「絶えず祈ること」「どんなことにも感謝すること」なのです。それはわたしたち人間のうちに根拠のあることではなく、ただわたしを愛し、わたしたちと共に歴史を歩もうとされる神の愛の御心に根拠のあることなのです。だから、わたしたちは喜ぶ事が出来る。絶えず神の前に立つ事が出来る。そこですべてのことを恵みの視点からとらえなおすこと、神に委ねることを学ぶ事が出来ます。そして、それはわたしたちを恵みのうちに生かされてあることへの感謝へと押し出してゆくでしょう。これこそが、神さまが、キリスト・イエスに結び付けて下さったことによって、わたしたちがそのように生きる者となること、つまり、神によって取り分けられ

た存在、聖なる存在として生きることにはほかならないのです。そして、いまそのように生きるための場として、わたしたちの生きる教会を備えて下さっている。このことが本当に感謝なこと、神の恵みの働きなのです。

お祈りをいたします。

神さま、暗い夜の間も守られて、新しい朝、新しい命に生かしてください、愛する兄弟姉妹とともに、わたしどもを恵みの光の中に導いて下さり、信仰者として生きる道筋を整えてくださいましたことを感謝いたします。振り返っても、先を望んでも、上を仰いでも、うつむいても、あなたの恵みがわたしたちを囲んでいます。ただ、わたしたちが自分のうちを覗き込んで、みずからのうちにあるもので生きよう、判断しようとするのではなく、どんなときでもわたしの外に、あなたの御前に進み出て、キリストの御顔を仰いで生きる者とさせてください。そのことによって、あなたの働きを表すものとさせてください。この群れを守り、清めて、あなたの働きへとこの週も遣わして下さい。願いと感謝、わたしたちの大牧者である主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン